

高齢者の救急搬送と在宅支援体制の関連性

切東美子
(摂津ひかり病院)

研究は、高齢者の救急搬送に関する傾向を明らかにし、在宅支援体制との関連性を検討することを目的とした。2024 年 1 月から 12 月までの 1 年間に摂津ひかり病院に搬送された救急患者 210 名（うち 144 名が 75 歳以上の高齢者）を対象に、搬送理由、要介護度、訪問診療・看護の有無などのデータを分析した。その結果、救急搬送の約 7 割が高齢者であり、特に 80 歳代が多く、主な搬送理由は肺炎や骨折、外傷であった。入院となった高齢者のうち、中等度から重度の要介護者が多くを占め、訪問診療や訪問看護を利用していた中重度要介護者は、救急搬送後に自宅へ帰る割合が高かった。これにより、在宅医療・介護支援の有無が救急搬送後の対応に大きく関与していることが示唆された。因果関係モデル（SD モデル）を用いた解析からも、在宅支援体制の充実が救急搬送件数の抑制に寄与する可能性が示された。今後は医療と介護の連携をより一層強化し、地域における在宅支援サービスの啓発を進めることで、不要な搬送の回避および地域医療の質的向上が期待される。